

## つくえない

2年生の教室に顔を出すと、「つくえない？」

とんでもない日本語が使われています。わけの分からない言葉。担当教員は続いて「そんな言い方しないでしょ。“つくえ”は活用しないのです。」体言と用言について例をもって説明していたのです。「つくえない・つくえます・つくえとき・・・」違和感だらけです。“つくえ(机)”という名詞は、形を変えることはありません。活用しない単語は“体言”です。食べるなどの動詞は「食べない、食べます、食べるとき・・・」のように活用するので用言です。用言には形容詞や形容動詞も含まれます。この日は、文法の授業でした。日本語の文がどのような決まりで成り立っているかを整理する学びです。文を「文節」や「単語」に分けて性質や働きを調べ、主語と述語のつながり、即ち、“文の骨格”を理解することで、読解力や記述力の土台を作ります。背骨という骨格を たゞんご のよう丸め、寝入りそうな生徒に回答権を与え、背筋が伸びるように変化させていました。いわば活用です。指名された生徒は よう元 気になっていきました。

背骨と言えば、1年生は“モアレ検査”を実施しました。背骨のゆがみやねじれを早期に発見するための検査です。「背筋を伸ばして!」と教員は生徒に対し、何度も声かけをします。その理由は見た目の美しさだとか、話し手に対する礼儀だけにはとどまりません。背筋をのばすと、脳が覚醒し、情報処理に必要な短期的な記憶力などが高まります。さらに、覚醒作用のあるノルアドレナリンが脳内に分泌されるのです。効率よく学習を進めるには、背筋を伸ばすべきなのです。背骨は大事です。

2年A組の教室に入ると、モニターの中で火の粉が散っていました。刀鍛冶です。日本刀の原料



となる鉄は、砂鉄から“たたら製鉄”によって得られます。たたら製鉄について説明する動画でした。理科の授業の単元は酸化と還元。たたら製鉄とは砂鉄(酸化鉄)に木炭を加えて加熱し、鉄を取り出す方法です。化合物から酸素がとれる反応を還元反応といいます。ヨーロッパやアジアに広まった、たたら製鉄は古墳時代にはすでに日本に伝わっていたと言われ、日本独自の発展を遂げてきました。しかし、近代高炉による製鉄が本格化するようになると次第

に衰退。重要無形文化財としての日本刀の鍛錬技術を保存するためにも、原料であるたたら製鉄でつくられた鉄(実際には100%鉄だけでは柔らかく、鉄に0.02%~2%程度の炭素が混合した鋼である)が必要となり、1977年、日本美術刀剣保存協会により、奥出雲の地で日刀保(にっとうほ)たたらとして復活したとのこと。刀鍛冶は、熱せられた硬い鉄を重い槌で力強く正確に叩くため、上半身の力だけでなく足腰をしっかりと据え、背筋を真っ直ぐに伸ばして重心を低く保つことが基本となります。背筋を伸ばすことが重要なんですね。この授業の後半では生徒たちが背筋を伸ばし、実験の考察を叩きあげていました。

刀鍛冶が鉄(鋼)を炎で熱して何度も叩き(鍛)あげ、純度を高めて強く美しい刃物へと仕上げていく(錬)工程を『鍛錬』といいます。鍛錬とは、刀鍛冶の作業に由来し、“厳しい訓練や修行を積んで技芸や心身を強く鍛えること”を意味するようになりました。

試験一週間前となりました。清中生の皆さん、この一週間は『鍛錬』です。叩いて叩いて叩きあげるので。脳ミソの活動を高めて強く美しく仕上げて試験当日を迎えてください。

鍛錬してこない人につくえないのです。「机がないなら 立ったら いい」などと言わぬこと。



刃物屋三秀 HPより